オーガスト
オフィシャルハンドブック
2015年春号
千の刀濤、桃花染の皇姫
せんのはとう、つきそめのこうき
AUGUST
OHB-150502

PREFACE－まえがき

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。
何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

PSVITA 版『大図書館の羊飼い -Library Party-』が予定通り 2015 年 2 月 12 日に発売となりました。
お客様アンケートページ（http://aria-soft.com/daito/entry.html）もご用意いたしましたので、プレイ終了後にご意見ご感想などをお寄せいただければと思います。

また、TV アニメーション『大図書館の羊飼い』の放送が終わり、Blu-ray & DVD が発売されています。
アニメーション製作スタッフの皆様のおかげで楽しい作品になったと思っておりますので、お買い上げいただければ幸いです。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2015 年春　オーガスト /ARIA 拝

CONTENTS

3 …… 『大図書館の羊飼い -Library Party-』Short Story 約束の喫茶店 安西秀明 /挿絵・夏野イオ

10…… スタッフ対談

11…… あとがき

大図書館の羊飼い　ショートストーリー

約束の喫茶店

安西秀明

夏休みも残り一週間を切っていた。
普通の人間になった金魚……いや美沙希が戻ってきたのは、ほんの二日ほど前のこと。俺や店長との再会を喜んだあと、美沙希は普通の人間として暮らすための準備を始めた。
「美沙希、食器類はどうする？」
「ひとまずキッチンに移動させてください」
美沙希の部屋に運ばれた多くの生活用品。俺は今、それらの片付けを手伝っている。
昨日まで部屋の中はほとんど空っぽの状態だった。食事などを必要としない羊飼いだった頃は、それでよかったのだろう。
しかし人間に戻ったことで、様々なものが必要となった。幸い、この部屋には家具が備え付けられている。それに父親である店長からの援助もあったので、一通りの必需品は揃えることができた。
「京太郎さん、少し休憩にしませんか？」
「だな。にしても暑い」
片付けと同時に掃除も行っているので、エアコンはつけずに窓を全開にしている。
床に座り、備え付けのベッドに背中を預けた。
「京太郎さん、隣に座ってもいいですか？」
「もちろん」
体をずらすと、そこに美沙希がちょこんと座った。遠慮がちにくっついてきた細い肩が、もじもじと動いている。
「すいません京太郎さん、色々と手伝ってもらって」
「いいって。それより一人暮らしは大丈夫そうか？」
「もう。子供じゃないんですから平気ですよ」
美沙希が小さく頬を膨らませた。
ちなみに美沙希は、店長と親子で暮らすことも考えていた。しかし店長の部屋も単身者用だったため、同居はできなかったのだ。
まあ、そのほうが俺と会いやすいだろうし結果オーライかもしれない。
美沙希が座ったまま体を預けてくる。
「一つだけ欲を言えば、京太郎さんのマンションともっと近い場所がよかったです」
床にあった俺の左手に、美沙希の右手が重ねられた。指の間に、細い指先が入り込んでくる。
「同居とか、できればいいんだけどな」
「あはは、お父さんに説明できませんよ」
「そりゃそうか」
「でも、いつかできるといいですね。毎日、二人で起きて、二人で暮らして、二人で寝て」
二人で寝て、という言葉を聞くと、あの夜を思い出してしまう。辛そうな美沙希を放っておけず、俺の部屋で背中合わせに寝た夜のことを。互いに眠れず、まだ羊飼いだった美沙希の背中を俺は抱き締めたのだ。
同じことを思い出していたのか、美沙希と目を合わせると照れくさそうに笑った。
とりあえず同居はお預けだ。まずはこの部屋を片付けなくてはいけない。
「夏休み中に頑張れば、美沙希が暮らす準備も終わりそうだな」
「そう……ですね」
なぜか歯切れの悪い返事だ。
「どうかした？」

「あの、京太郎さん。夏休みもあと少しですから、その」
夏休みもあと少し。
そう言われると急に時間が惜しく思えてきた。開け放った窓の向こうにある、晴れた夏の空がもったいなく感じられる。
こうして部屋を片付けることよりも、やるべき事があるような気がしてきた。たぶん美沙希も、同じことを考えているのかもしれない。
「デートでもするか」
「ふえっ！？」
「いや、せっかくの夏休みだし。デートでもしたほうがいいと思って」
「わ、私も同じことを考えていました」
「もう夏休みもあんまりないし、明日にでも行くか」
「ぜひ行きましょう！」
我慢できないといった様子で、美沙希の表情が綻んでいく。
「そんなに嬉しい？」
「当たり前じゃないですか。ふふふっ、デート、デートっ」
よほど嬉しいのか、俺の腕に抱きつきながら鼻唄を歌っている。
「初デート、楽しみですね」
美沙希の言うとおり、恋人になってからは初めてのデートだった。
楽しみなのは俺だって同じだ。思わずニヤけてしまう口元を見られるのが恥ずかしかったので、窓の外に顔を向けた。
数秒ほどそんな状態が続くと、美沙希がふと、俺の腕から離れた。
「実は私、京太郎さんと行きたい場所があるんです」
さっきまでとは違う、落ち着いた声音。視線を戻すと、やけに改まった顔で俺を見上げていた。遊園地に行きたいとか言い出す雰囲気ではなさそうだ。
「昔、お母さんとお父さんが二人でよく行っていた喫茶店があって、そこに京太郎さんと行きたいんです」
「喫茶店？」
「サフランという名前の喫茶店です。二人が結婚する前から何度も通っていて、初めてデートをしたときに訪れた店でもあるんです。私が子供のころ、お母さんがその話を聞かせてくれました」
美沙希の母親は、事故で亡くなっている。だが、目を細める美沙希の表情に悲愴な色はない。ただ大切な思い出を懐かしむように微笑んでいる。
「お母さんと約束してたんです。恋人ができたら、私も初めてのデートはサフランに行くって」
「じゃあ、明日はサフランに行くか」
「だから私と……え？」
即答したせいか、驚きの表情を向けられた。
「お母さんとの約束なんだろ？」
「で、でも京太郎さん、私とお母さんの約束に付き合うのは迷惑だったり……」
「そんなわけないって。恋人なんだから、一緒に行きたいって言ってくれるだけでいい」
言い終える前に答え、小さな頭に手を乗せる。頭を撫でると、美沙希がまた笑顔に戻った。
「ありがとうございます京太郎さん。これでやっと、お母さんとの約束が守れます」
美沙希が胸に手を当てて安心したように笑った。
羊飼いだった頃は、母親との約束が守れずにずっと苦しんでいたのかもしれない。
思わず、撫でていた手で美沙希を抱き寄せる。華奢な身体は、俺の腕の中にすっぽりと収まった。
「京太郎さん、どうしたんですか？」
「いや、美沙希がお母さんとの約束を守れて、俺も嬉しくなったんだ」
今にも泣きそうに見えたから、とは言わなかった。
「心配してくれて、ありがとうございます」
「バレたか」
「京太郎さんは優しいですから」
美沙希もまた、俺の背中に手を回してくる。
「羊飼いになってからは、もう諦めていました。好きな人とデートの予定を立てたり、こうやって抱き締めてもらうこと。それにお母さんとの約束も。たまに、もし自分に恋人ができたらって想像したりしてたんです」
「その想像は現実になっただろ。今ならお母さんとの約束も守れるし、デートもこれから沢山できる。抱き締めるくらいなら、いつだってやってやる」
「はい。だから心配しないでください。私は今とっても幸せですから」
そう言って、俺の胸に頬を寄せる。離れないよう、いつまでも側にいてやりたいと思った。
「ちなみに京太郎さんといると、想像よりずっとドキドキしますよ」
「俺だって、美沙希といるときはそんな感じだ」
「ふふ、嬉しいです」
美沙希の髪の毛に鼻先を埋めると、腕の中にある身体がぴくりと動いた。
「いい匂いがする」
「もう、くすぐったいですよ京太郎さん」
じゃれ合いながら、俺は明日のデートのことを考えた。気になるのは、やはり喫茶店のことだ。
「サフランって、どんな喫茶店なんだろうな」
「ひょっとすると、カミツレに似ているのかもしれません。二人が喫茶店を始めようと思うきっかけにもなった店ですから」
「じゃあサフランがなかったら、スミレやカミツ

レもなかったかもしれないってことか」
「そうですね。改めて思うと、なんだか不思議な感じです」
美沙希の両親は初めてのデートでサフランを訪れてから、何度も通うようになった。そして、自分たちも店を開きたいと思いはじめる。やがて二人は結婚してスミレを開き、美沙希が生まれた。俺たちも、そんな幸福な未来を歩めるのだろうか。結婚して、二人の夢を叶えるような。
「京太郎さん、どうしたんですか？」
「いや、何でもない」
さすがに結婚は気が早いか。
もう何年も連れ立っているような気分だが、俺たちは恋人になってからまだ一ヶ月ほどだ。
焦らずに、まずは初デートが楽しい思い出になるようにしよう。
「あ、そういえば」
美沙希が何かを思い出したように声を上げた。
「お母さん、私が約束を守れたら面白い話を聞かせてあげる、って言っていたんです」
「面白い話って、大笑いできるような話ってことじゃないよな？」
「いえ、そういう感じではなかったんですけど。一体、なんの話をしてくれるつもりだったんでしょう？」
考えてみるが、俺には想像もつかない。
首を傾げていた美沙希は、やがて吹っ切れたように頭を振った。
「ううん、とにかく私はお母さんとの約束を守ります。京太郎さん、明日の予定を立てましょうか」

■

翌朝、俺は待ち合わせ場所の駅前にいた。昨日と同じく、空は快晴だ。
美沙希がなかなか現れないので、辺りを見渡してみる。すると、見覚えのある小さな背中を発見した。
なぜか店の前に立ち止まって、ガラス越しに店内を眺めていた。かと思えば、体をひねったりしている。
もしかして、ガラスに映る自分を見て服装を確認しているのだろうか？
早く顔が見たくなり、走って近寄っていく。
「うーん」
美沙希はガラスに映る自分を見て唸っていた。そのまま手を広げて大きく体を捻ったところで、ようやく俺に気付く。
「あ、あれ、京太郎さん！？」
「悪い、驚かせたか」
バランスを崩しそうになっていたので、肩を持って支えてやる。
「悩まなくても大丈夫だって。ちゃんと可愛いから」
「へ？」
いきなり俺が現れたせいか、目を点にしている。フリーズしているようだ。数秒ほど経ってからびくっと震え、首から赤くなっていく。
「い、いつから見てたんですか」
「さっき見つけたばっかりだって」
「うう、どっちにしたって恥ずかしすぎます」
その場に体育座りした美沙希の頭をぽんぽんと優しく叩く。
「まあ、そろそろ時間だったし見つかってよかったよ」
「えっ？」
待ち合わせの時間が近付いていることに、いま気付いたらしい。がばっと立ち上がり、頬を染めたまま小さく頭を下げる。
「すいません、京太郎さんに会う前に、どうして

も身なりが気になってしまって」
「もしかして、初デートだからちょっと緊張してる？」
「いえ。ちょっとと言うか……かなり、です」
か細い声で言いながら、両手の指をもじもじと絡めている。そんな仕草が、たまらなく愛おしかった。片方の手を取って優しく握ってやる。
初めは少しだけ驚いていたが、美沙希もゆっくりと握り返してきてくれた。小さく柔らかい手の平がぎゅっと密着してくる。
伝わってくる体温がいつもより熱っぽく感じるのは、きっと俺も初デートで緊張しているせいだ。
「じゃ、行くか」
「はいっ」
はにかむように笑った美沙希と歩き始める。
この笑顔を見ると、今日は楽しい一日になるだろうという予感がした。目指すはサフランだ。

■

「あう……」
テーブルに突っ伏した美沙希が、何度目かわからないうめき声を上げる。完全に意気消沈といった様子だ。
「美沙希、大丈夫か？」
「うう、まさかサフランがなくなっていたなんて」
俺たちはあの後、サフランへと向かった。しかし目的地にあったのは高級感の漂うレストラン。とてもじゃないが喫茶店には見えなかった。
念のため店の人に聞いたところ、十年ほど前にサフランは移転してしまったらしい。それ以上の情報は得られず、俺たちはこうしてファミレスで涼みながら行き詰っている。
ネットでも調べたが、サフランの行方はわからなかった。もう廃業している可能性だってある。それでも美沙希は諦めようとしない。
「もう少し、もう少しだけ探してみましょう」
「ああ、俺も最後まで付き合うよ。お母さんとの約束、守らなきゃな」
「それに、初めてのデートですから」
そう、サフランの調査には初デートの成功もかかっているのだ。最後まで調べなくては、俺たちの気が済まない。
「店長は何か知らないのか？」
「どうでしょう。昨日サフランの場所を聞いたとき、何年も行ってないと言っていましたけど」
「当時のことでも、何でもいいからサフランのことを教えてもらおう」
そして美沙希が、俺の携帯で店長に電話をすることになった。
ちなみに美沙希はまだ携帯を持っていない。羊飼いのころに使う必要がなかったせいだろう。
「あ、もしもし、お父さん？」
店長の携帯に繋がったらしい。
さっそく美沙希は今日のことを説明して、相槌をうち始める。
だんだん表情が明るくなっていくところを見ると、色々なことを聞けたようだ。
「そうだお父さん。昔、サフランで何かあったの？　お母さんが面白い話があるって言ってたんだけど」
気になっていたらしく、美沙希が最後に聞いた。
手持ち無沙汰になっていた俺は、電話越しでも頷くという美沙希の新たな癖を発見して得した気分になっていた。
「えっ、ほ、本当に！？」
なぜか驚いている美沙希。その後、何度か言葉を交わしてから電話を切った。
携帯を返してもらいながら、俺も気になってしまったので聞いてみる。
「もしかして、面白い話ってやつが聞けたのか？」
「とっても面白い話が聞けました。お父さんにも心当たりがあったみたいです」
「どんな話？」
「ふふふ、お店に行くことができたら、教えてあげます」
「なんだそりゃ」
俺は携帯を使い、再びインターネットで検索を開始する。店名ではなく、店長から聞いたサフランの特徴を検索ワードに追加していく。すると、一つの気になる喫茶店がヒットした。
店の名前こそ違うが、メニューや雰囲気など、全ての特徴が一致している。俺たちは、その喫茶店の場所を確認してから頷きあった。

■

携帯の画面に表示されている地図に従い、俺たちは『クロッカス』という名前の喫茶店を訪れていた。落ち着いた感じの店構えだ。
「なんだか、カミツレに似ていますね」
「美沙希、入ってみよう」
扉を押し、二人で店に入る。
店内はブラウンの多い内装で、さらにカミツレを思わせた。
席に案内されてから、美沙希が店員さんに質問をする。聞くのはもちろん、サフランとクロッカスの関係についてだ。
店員さんの答えを要約すると、確かにこの店は『サフラン』という名前だった。しかし十年ほど前、店舗を移すことになった。その際に、心機一転という意味もあって店名を『クロッカス』にしたのだという。

お礼を言ってからオムライスを注文すると、店員さんはカウンターに戻った。
椅子に座り直した美沙希は、興奮した様子で話しはじめる。
「まさか、お店の名前が変わっていたなんて」
「クロッカスとサフランは共通点の多い植物だし、そのへんが由来なのかもな」
まあ、これで検索してもヒットしない理由がわかった。そもそも名前が間違っていたのだ。
美沙希は泣き出しそうな顔になっている。
「でも、本当によかったです。お父さんとお母さんの思い出の場所が残っていて」
「俺も、美沙希が約束を守れてよかった」
「京太郎さんが一緒に探してくれたおかげです」
美沙希が大きく頷く。テンションが高いのは、そうでもしないと泣いてしまうからだろう。落ち着きのないまま、きょろきょろと店内を見渡している。
「お父さんが言ってた通りの内装ですね」
「サフランの頃の内装を、そのまま再現してるんだろうな」
店内には壁棚があり、たくさんの本や写真が並んでいた。
俺たちは席を立って、端からゆっくりと壁棚を眺めていく。額に入れられた写真も、重厚な装丁の本も、どれも古いものばかりだった。
「……」
「京太郎さん、すぐに本を読もうとしないでくださいよ」
「一ページだけ、いや十行だけ」
「だーめーでーす」
本を取り上げられてしまったので、仕方なく写真を眺めていく。
「写真に写ってる人、みんな笑ってるな」
「お店に来る常連の方を撮ったものだそうです」
「店長が言ってたのか？」
「はい。お父さんも撮ってもらったと言っていました」
ということは、これらの写真はまだ店が『サフラン』だった頃に撮影されたものだろう。
「あっ」
「つと、どうした美沙希？」
突然、前を歩く美沙希が足を止めた。ぶつかりそうになったのを、何とかこらえる。
どうやら一枚の写真に釘付けになっているようだ。見ると、仲睦まじそうな一組の男女が写っていた。年齢は二十代といったところだろうか。
凝視していると、男性に見覚えがある気がしてきた。
「なあ美沙希。この人たちどこかで会ったっけ？」
「これ、お父さんと、お母さんです。たぶん、まだ私が生まれてない頃の」
「……マジか」
「見間違えるはず、ありません」
どうりで男性に見覚えがあるはずだ。これは若い頃の店長なのだ。
そして初めて見る美沙希の母親。小柄な体躯や自然な微笑みが、確かによく似ていた。
「……お母さん」
その声は震えている。
「お母さん、ずっと、待っててくれたんだ」
美沙希が、俺の手をぎゅっと握った。
写真の中の母親に、俺たちの関係を教えてあげるように。
「約束、ちゃんと守りにきたよ……お母さん」
美沙希の目から、ぽろぽろと涙がこぼれ始めた。
写真の中で、母親は優しく微笑んでいる。
俺は美沙希が泣き止むまで、ただ手を握っていた。決して離さないと、写真に向かって誓うために。
オムライスが運ばれてくるまで、俺たちはそうしていた。店員さんは目を腫らしていた美沙希に、少しだけ驚いていたようだ。
「京太郎さんが私を泣かせたように見えたかもしれませんね」
「とんだ冤罪だ」
冗談を言い合ってから、二人でオムライスを食べ始める。
「美沙希、面白い話ってなんだったんだ？」
店に来ればわかるかもしれないと思ったが、店内を見渡しても「面白い話」に結びつくものは見当たらなかった。
「店に着いたし、教えてくれるんだろ？」
「え、えっと」
なぜか躊躇うような反応だ。オムライスを食べる手を止め、わずかに頬を染めている。恥ずかしい話なのだろうか？
短く息を吸い込んで、美沙希が口を開く。
「お父さんがお母さんにプロポーズした場所が、サフランだったらしいです」
「……お父さんって、店長だよな」
驚きを隠せず、思わず当たり前の質問をしてしまう。
美沙希もごまかすような笑みを浮かべて頷き、オムライスをスプーンでつついていた。
「京太郎さんを驚かそうと思ったのに、なんだか私が恥ずかしくなってきました」
「そんなこと考えてたんだ」
「朝、びっくりさせられた仕返しです」
小さな仕返しに、思わず頬が緩んでしまう。おかげで驚きはどこかに消えてしまった。
「初デートとプロポーズが同じ場所、か」
「お父さん、けっこうロマンチストだったみたいですね」
「美沙希はそういうの好き？」

「大好物です」
しっかり遺伝しているらしい。
俺たちは美沙希の両親と同じように、喫茶店を初デートの場所に選んだ。
さらに倣えば、俺はこの店でプロポーズして美沙希と結婚するんだろうか、なんてことを考えてしまう。
店長が美沙希の母親にプロポーズしている光景が、頭の中に浮かんだ。そして二人の姿が、だんだんと俺たちに変わっていく。
結婚。昨日も考えたことだ。早い話だと、遠い未来の話だと思った。
だが、好きな人と一日でも早く、そうなりたいと願うのは当たり前なのかもしれない。
少なくとも俺は初めての恋人と、そんな未来が訪れてほしいと願っている。
せめてこの想いだけでも、俺は伝えたくなった。
「俺も、いつかここで美沙希にプロポーズするんだろうな」
「あはは、京太郎さん、予告してどうするんですか」
冗談だと思われてるんだろうな。俺も合わせて笑ってみるか。
「ははは、まあ本気だけど」
「あはは……ええっ！？」
美沙希が皿の上にスプーンを落とし、食器のぶつかる音が店に響いた。慌ててスプーンを拾い、戸惑いの表情を向けてくる。
「あの、これはもうプロポーズになってませんか？」
「予告だって。それまで待っててくれって言いたかったんだ」
ここで結婚を申し込んだところで、今の俺には一緒にいることしかできない。
美沙希の人生を背負える準備が整うまでは、申し訳ないが待ってもらうことにしよう。例えば、お金とか。
「初デートでプロポーズの予告なんて、お父さんが聞いたら何て言うんでしょうね」
「……今は秘密にしてくれるとありがたい」
「ふふふ、どうしましょうか」
いたずらっぽく笑い、俺の反応を楽しんでいる。
もしかして、これも仕返しの一環だろうか。
「美沙希の返事、期待してるからな」
「私だって、ここに来るたびに期待しちゃいますよ。ずっとそわそわしなきゃいけません」
「じゃあ約束するよ。その時は、俺からここに誘う」
「わかりました、約束ですよ」
楽しみが一つ増えて嬉しいのか、美沙希が小さな笑い声を上げる。思わず俺も笑顔になった。
「待ってますね、覓さんのプロポーズ」
俺が美沙希を、クロッカスに誘う日はいつだろうか。ただ、決して遠くない未来のような気がする。
美沙希の母親の写真を見る。
柔らかな微笑みは、俺たちのことを祝福してくれているように見えた。
――必ず、美沙希を幸せにします。
心の中で、俺は呟いた。
「美沙希。初デートは成功だよな？」
「もちろん、素敵な思い出になりました。これからも色んな場所に行きましょうね京太郎さん！」
夏休みはもう終わってしまうが、俺たちは恋人としての生活を始めたばかりだ。色んなことを二人で体験して、乗り越えて、喜びあっていけたらいい。
そうして、いつかこの店で俺はプロポーズをするのだろう。
オムライスを食べながら、これからの生活に胸を弾ませた。

彷徨(さまよ)う刃は、
皇姫(あるじ)と出会った――

千の刃濤、桃花染の皇姫

せんのはとう、つきそめのこうき

オーガスト最新作 鋭意開発中

シナリオ：鳥原拓 ほか ／ 原画：べっかんこう・夏野イオ

榊原拓（以下「榊」）：さあ対談の時間がやってまいりました。
べっかんこう（以下「べ」）：まずはPSVITA版の『大図書館の羊飼い-Library Party-』をお買い上げいただいた皆様に御礼を。
榊：ありがとうございました！
べ：オフィシャルサイトでアンケートも受け付けてますのでぜひ！
榊：アンケートは見てますか？
べ：見てますよー。やっぱり新キャラの金魚への感想が気になりますね。
榊：結構、プレイ後の好きなキャラでは「一之江金魚」を上げてくださっている方も多いです。
べ：ありがたいですね。
榊：限定版をお持ちの方は特典の小説も読むと更に楽しんでいただけると思います。
べ：アンケートの数を見ると、買ってくれたユーザーさんの10%以上の方からご感想をいただいていることになるみたいですよ。
榊：すごいなあ。ありがとうございます。
べ：続けてトラベリング・オーガストのお話もしましょうか。
榊：トラベリングオーガスト、今年もやらせていただくことになりました。
べ：この冊子が出るのは、チケットの一般発売直前ですね。
榊：今回はまさかのフルオーケストラ構成ですよ。会場となるオペラシティも、音響が素晴らしいとのことなので是非楽しみにしていてください。
べ：ですね。僕も3公演中どれかは見られると思うので楽しみにしています。チケットまだ間に合うと思いますので是非お越しくださいませ。
榊：今回は物販もちゃんと時間を取れるので、前回のような混乱は無い……ように頑張ります！
べ：最後に新作の話を。前から情報はちょこちょこ出していましたが、大図書館LPが終わって本格始動ですね。
榊：はい。今、シナリオチームは本文をもりもり書いています。
べ：原画、CGチームも立ち絵を描いたりしています。他にはピンナップを各ゲーム誌等で描きおろしているので楽しみにしていてください。
榊：今回のシナリオは、書きながら模索してる部分もあります。『穢翼のユースティア』でも意識してたことなんですが、作品の世界観を考えると、カタカナの外来語、特に最近の言葉はなるべく使わないようにするとか。
べ：現代日本とは違う、ファンタジーが入る部分ですからね。雰囲気を守るのは重要だと思います。原画、CGチームも同じくいろいろ考えながらやっています。
榊：大変なんですれけども、書いてると楽しい部分でもありますよ。
べ：確かに、一から考えなきゃいけない部分は多いですが楽しいですね。
榊：僕らもいろいろ試行錯誤しながら楽しく作ってますので、どうぞお楽しみに！
べ：体験版は……いつ頃出せるのかな？
榊：なるべく早くには体験版が出せるように頑張ります。
べ：超頑張ります！
2015.4.17　16:30　社内にて

POSTSCRIPT－あとがき

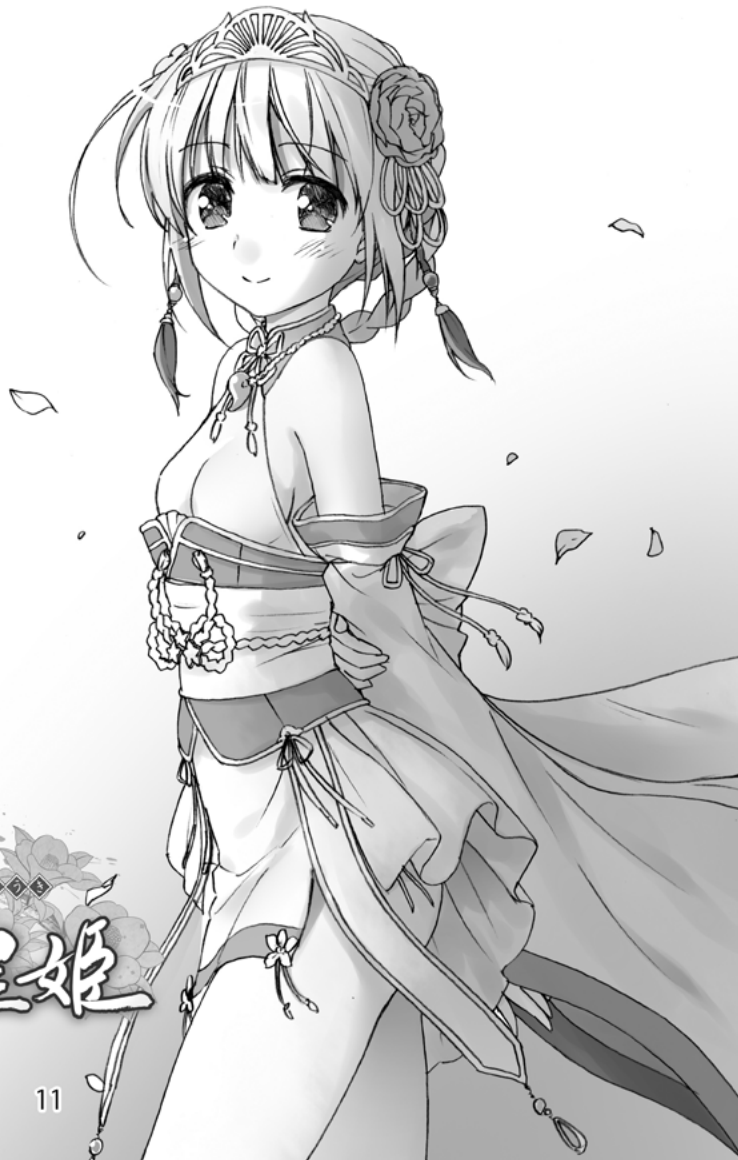
オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

現在開発室では、新作『千の刃濤、桃花染の皇姫』の制作が進められています。
原画・CG・シナリオ各チームも、より楽しんでいただけるソフトになるよう日々取り組んでおりますので、今後のリリース情報などにご注目いただければと思います。

そして、8月22日・23日の両日、東京オペラシティにて「トラベリング・オーガスト2015」を開催することとなりました。
今回はなんとフルオーケストラ構成！
音楽スタッフも相当力を入れて準備を進めており、前回のトラベリング・オーガストよりも本格的なコンサートを目指しています。
ご興味のある方はぜひオフィシャルサイト（http://www.side-connection.com/august-concert2015/）をご覧くださいませ。
多数のお客様のご来場をお待ちしております。

それでは、今回はこの辺で。
今後ともオーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2015年春　オーガスト/ARIAスタッフ一同



オーガストオフィシャルハンドブック
2015年春号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

http://august-soft.com/
http://aria-soft.com/

千の刀濤、桃花染の皇姫

せんのとうとう、ももぞめのこうき

オーガストオフィシャルハンドブック
2015年春号

AUGUST

(C)AUGUST All Rights Reserved.

OHB-150502